

「私の自画像」

鈴木和夫（元凸版印刷社長）

アナログの羽ペンを握り

デジタルのCDの付いた帽子を被る姿



一口で言えば、それが私の仕事人生における「私の自画像」であろう。仕事人生と敢えて言うのは、昭和十八年十二月に、大学三年になったばかりの時、既に敗戦の色濃くわれわれもそれを感じ取っていたが、突然、文科系学生の徴兵猶予が廃止されて、「学徒出陣」の歓呼の声に送られて、海軍軍人としてのご奉公という「仕事」に始まり、敗戦により民間人に戻されたその年、昭和二十年十二月より、平成十八年六月までの六十年半の凸版印刷での「仕事」を振り返ってのことであるからだ。

その間の日本社会の変化の激しさにキリキリ舞いをしながら、夢中で日本国の経済復興のためにお役に立つべく夜を日について働いた。その仕事の中で特に私の人生を大きく揺さぶったのは、一九八一年から一九九一年までの社長時代のことであるが、技術に端を発したアナログからデジタルへの急激な転換が、一般社会を巻き込むように襲って来たことであろう。その危機とも言える時期を全社員が一丸となって知恵を出し身体を張って働いたのである。

その時の経営方針として、「**基本に徹し 先端を走ろう**」というスローガンを掲げて、私はその先頭に立った。

どうやら会社がその方向で歩む姿が見えて来たので十年務めた社長を退き会長に就き、以降は主に海外関係との付き合いの中での、印刷業の将来像を追うことにした。「自画像」という特集の命題に直接応えるのは、ここまでである。

そこで、社長を退き会長に就いてからの、私の仕事人生を追いながら、これからの「生き様」を考えてみたい。一例として特に印象に残る中国の様子を綴ってみる。

―俳句に見る 十五年前の中国―

俳句 六選 一九九三年

秋深しただ静寂の天安門（北京）

銀輪の四馬路スママロに群れる霧の朝（上海）

重慶の霧に蔣氏を偲びたり（重慶）

麻刈つて洗い干し裂く村総出（沙市）

故事濟々黄鶴楼に月満ちて（武漢）

満月を供え百万弗夜景（香港）

その頃の中国は、四千年の歴史を背負った大国という印象であった。



沙市の麻の出荷 家族総出

私が中国で経験した最大の「ショック」とその後の経過

私の勤務していた凸版印刷は、一九七〇年代の早い頃から、日本中国文化交流協会のお世話で、中国の出版人や印刷大のグループを訪問、交流を行う行事に参加させて頂いており、私もそのメンバーに加えて頂き、何度か中国の要人にお目にかかり、交流の輪を広げていた。また、私の想いをこめて凸版独自で、印刷や包装技術者を研修生として日本本土や香港やシンガポールのわが社の工場に招聘して新技術を身につけてもらい、親密の度合いを深めていた。

そこで一九八七年に、更にその交流を深め、広げる必要があるとの判断のもと、北京市の北京飯店内の一室に、駐在員事務所を開設した。初代の所長として高畑君という元気な青年を指名した。開設披露宴は北京人民大会堂の「湖南の間」で催し、国务院兼北京市長・陳希同、副市長・張健民先生をはじめ政府要人、中国印刷技術協会会長・王益、中国包装技術協会会長・邱純甫先生などの関連業界の会長、幹部など、それに、日本国大使・中江要介様など百五十人を超す来客で溢れ座席が足りない状態であった。その大勢のご来客の皆様には私は社長として、北京事務所の開設の趣旨をご説明し、今後一層の交流の輪を広げるとともに、親密の度を深めるよう相互に努力したいといった趣旨の挨拶をした記憶がある。

たまたま、開所式の当日は、サントリー北京マラソンの前夜祭が行われた。終了後、宿泊していた北京飯店でサントリーの佐治敬三社長に見つかり、カラオケをご一緒したという懐かしい思い出もある。

その頃の北京は、経済発展の途上であつて、目抜き通りの長安街などは、通勤時間には、広い道路が自転車の波と渦で溢れ、道路を渡るのも難しいくらいであった。しかし、治安は極めて良く、北京飯店を中心に朝、晩、私は一人歩きして写真を撮ったりしたが、何の危険も感じなかった。

ところが、駐在員事務所も、ぼつぼつ油が乗って、仕事らしい仕事が始まった一九八九年六月四日に、突如としてかの「六四天安門事件」が天安門広場で勃発した。民主化を求めて座りこみをしていた学生を中心とした一般市民のデモ隊が、「人民解放軍」によって武力弾圧された大量虐殺事件である。その事件は、わが駐在員事務所の真ん前で起こったのである。しかたなく、北京事務所は、中国人の事務員を残して、日本人は帰国せざるを得なかった。しかし、二ヶ月ほどで、さすがの大騒動もすっかり跡形もなく治まり、北京は以前と変わらぬ活気を取り戻したので、北京事務所も八月初旬には、以前と同様の布陣に戻った。

私の心の中に、あの事件の心を潰すようなショックが、既に二十年近く経った今でも、目を瞑ると甦ってくるのである。しかし、あの大事件の数年後には、当時の自転車ではなく、自動車、バイクが^{ひし}奔めき合って、ぶついたり、こすつたりは、日常茶飯事で、大声を出して道路の真ん中で、他人に構わず怒鳴りあっているのを見て、中国人のバイタリティーを感じとったといっても過言ではなからう。発展途上国から技術・経済・政治大国に向けての十三億強といわれる人民のそのバイタリティーは、これから

どのように、どんな方向に向けて発揮されていくのであろうか。隣人としての中国の人民とわれわれ日本国民とは、過去に拘るばかりでなく、東アジアの纏め役として、そして指導者として、仲良く手を繋いで行きたいものである。しかし、それは口で言うのは簡単であるが、実行段階になると、大きな障害に突き当たる。それを実現するために必要なわれわれ日本人の心構えは、「〇〇大国」という言葉を忘れる？ 必要がある。そして世の中の人々の求めるものが、「物質」から「情報」に、言い換えれば「アナログ」から「デジタル」に、「アトム」から「ビット」に急速に変化していることを認識することから始まるのであろう。

北京の街が朝、夕「銀輪―自転車」が群れをなしていた頃は、豊富で安価で器用な労働力は、世界の製造業にとっては、大変に魅力あることであり、上海、香港、広州、深洲などの中国各地や、台北、マニラ、クアラルンプール、シンガポール、ジャカルタなどに、製造工場を設けて、安くて良質の製品を造って世界中に売り渡すのが日本の産業界の常識であった。



しかし、今日の世界の先端が求めているものは、「物」が中心ではなく、「知」に移り、しかもグローバル化の進展によつて、地球上の何処かに「知」があれば、国境を越えて手を結び、新しい製品、新しいシステムの開発が行われる現象が、当たり前(常識)という時代になりつつある。このことは、安い優れた労働力のみ頼っていた、今までの常識を全く覆すこととなるのである。

十三億強、そして十億強の人口を有する、今までは所謂「発展途上国」と見なされていた中国やインドでは、欧米などに留学して先端技術を勉強して帰国した優れた若者の知の世界が活躍をはじめている。しかも、アメリカが寝ている時間に、アジアは働くという時間差は、研究・開発時間を短縮するのに役立ち、それらの社会構造が、これからの世界の中で経済力の一つの大きな柱になっていくのではないだろうか。

そう考えていくと、われわれは東アジアに拘るだけでなく、インドを含めた亜細亜地域、或はオーストラリアを含めた西太平洋地域として、南北アメリカ地域、ヨーロッパ連合国地域と肩を並べて三極の一つの実力を備えなければならないであろう。そのための大きな鍵は、所謂「**知の分業**」であり、わが日本国の「**自前主義**」に拘っていた企業 業体質をどのように変化させるかの、知恵と努力が必要になってくる。

中東諸国やロシアなどのオイルマネーの動き、アメリカのサブプライムローンの問題による経済の落ち込みに無関心ではいられないが、われわれはもう少し長い眼で将来世界に対応する必要があると思う。

これらの思いを「自画像」に語らせるのは無理であろうか？

〔ほほづゑ〕二〇〇八年春 第五十六号 特集 自画像〕